文化財発掘

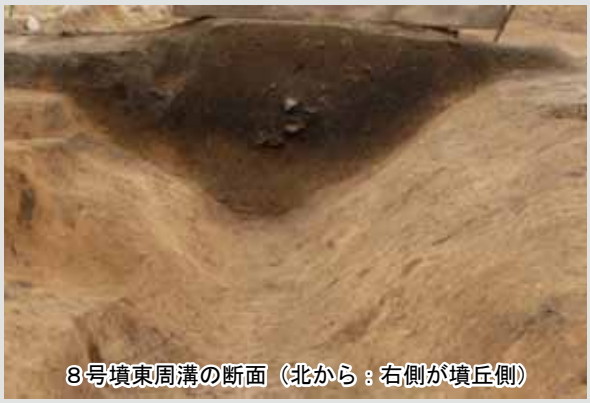
―京大キャンパス出土の埴輪―

京都大学吉田キャンパスの国際交流会館の建設に先立って平成23（2011）年におこなわれた発掘調査で、多量の埴輪片が出土しました。この発掘を実施した京都大学文化財総合研究センターは、大学構内の地中に眠る埋蔵文化財を中心に、その調査や分析から保管や活用にいたるまで包括的な視点から総合的な研究を実践しています。今回の特別展では、前身の埋蔵文化財研究センター時代を含め延べ100,000㎡におよぶ埋蔵文化財発掘調査のなかでも、比較的最近に注目され、そして復元がかなり進んできた、この埴輪の出土に焦点を当てました。

今から約1500年前の京都盆地東北部、現在では吉田二本松と呼ばれるこの地には、これまでに９基の古墳が見つかっています。いずれも、溝で区画した方形墳で、５世紀後半（古墳時代中期）の一時期に築かれました。そのうち、埴輪をともなうのは、８号墳だけです。

今回は、埴輪をともなった８号墳の位置づけを考えるために、これまでの吉田二本松古墳群の調査で見つかっている出土文化財からも、参考資料を展示しています。最新の成果と合わせてご覧下さい。

調査区西北隅で確認された掘削前の８号墳（東から）


８号墳東周溝の断面（北から：右側が墳丘側）

１．埴輪を掘る

吉田二本松８号墳は、後の時代に墳丘を削平され、周溝しか残存していなかった。しかも発掘調査区の隅で確認されたので（写真左上）、調査できた周溝は、東と南の辺を構成する部分だけで、北と西の周溝は発掘調査区の外に今なお眠っていると思われる。しかし、発掘できた周溝からは埴輪の破片が数多く出土した。これまで吉田二本松古墳群では、埴輪は、破片でもごくわずか、それも古墳時代より後の地層からしか出土していなかったので、これは予想外の発見であった。

埋蔵文化財の発掘　遺跡に眠る遺物や遺構（埋蔵文化財）が、発掘で私たちの眼前に現れる時は、当時の人びとの日常的意識から外れ、当初の機能を失った状態のはずだ（写真左下）。埋蔵文化財の発掘現場では、そうした遺構や遺物がどんな状況で土の中から出てくるか、この点に注意して調査が進められる。埋蔵文化財のもつ過去情報に依拠する考古学は、そうした“出方”を起点に、埋没状況、その場で遺構や遺物に絡んだ人間、そしてその人間の暮らしていた社会、さらにはその社会とほかの社会との関係、とその学問的可能性を広げていくのである。吉田二本松８号墳の出土遺物について、まずは“出方”を現場検証のように理解することに努めている。

埴輪の包含状況　８号墳の周溝からは、数点の弥生土器を除いて、古墳時代中期以外の遺物は出土していない。40 個体前後、破片数で１万点を超えると思われる埴輪の多くは、口縁部から底部まで表面状態がとても良く、長く風雨にさらされていたとは思えない。しかし、周溝の埋土は大きく３つの地層からなり、埴輪が出土した層は、この辺りの古墳時代～古代の通常の遺物包含層と共通する黒褐色の土であった。そして、周溝の中でも、底面から 50 ㎝前後埋まったところに集中し、墳丘側から流れ込んだようである（写真右上）。古墳の地盤は、弥生時代の砂質土石流がもたらした非常にもろい風化花崗岩なので、墳丘は、日照りと大雨のサイクルで度々崩れもしただろう。なお、埴輪の破片は、ほとんどが周溝の中にあり、周溝の外側からはほとんど出土していない。

出土情報の収集　こうした埴輪が実際にどう破片になって埋没したのか、また墳丘はどう崩落したのか。そうした課題の検討には、どの破片がどこから出土したか、という情報が不可欠だ。そこで、多くの破片に対し、回収に先立ってＩＤ番号を与え、それぞれ三次元情報を記録した。回収後に洗浄してからは、そのＩＤ番号などを注記した。うまく元の形に接着復元できた後も、学術資料として、研究者が出土状況を検討する時にその注記を確認できるよう努めた（写真右下）。

８号墳東周溝に埋まっていた埴輪（上が墳丘側）

馬形埴輪の破片ごとの注記（鞍左側）

埴輪の出土状況　埴輪の多くは、10㎝四方程度までの大きさの破片となっていた。口縁部も底部も偏りなく出土する。東南部での出土は散漫だったが、南の周溝からは、朝顔形円筒埴輪を含めて大小の筒形の円筒埴輪のほか、人や器物をかたどった形象埴輪も出土した。一方、東の周溝からは、円筒埴輪だけで、突帯が３条の小型品はなさそうである。

これらの埴輪のほとんどは、樹立後ほどなく墳丘から周溝へ盛り土とともに崩れ落ちて埋没した、と考えても矛盾なさそうである。例えば南周溝の西辺では、破片の分布域がおよそ重なる馬形埴輪と人物埴輪を見てみると、馬では左後脚の破片のいくつかだけが少し離れて東側から出土し、人物では左半身側の破片が馬の破片よりもさらに西側から出土した。人物は馬の引き手を右手で持つ馬子だとすれば、およそ西方を向いていた人馬が、いくぶん強い勢いで周溝方向へ倒れていく過程で、破片化しながら埋没したと考えられる。

周溝断面に見る埴輪の出方を加味すると、あるときに、墳丘にとどまっている破片を、埋まってきた周溝へ盛り土とともに一斉に掃き出したようにも思える。埴輪の出土が周溝内にほぼ限られることも、整合的である。そして、肩部に放射状の割れを認められる朝顔形円筒埴輪は、このときに割れたのかもしれない。

南周溝東辺の家形埴輪の出土状況（墳丘側から）

同上（掘り進み後）

南周溝東辺の円筒埴輪の出土状況（墳丘側から）

同上（掘り進み後）

例外的な出土状況　南周溝の東辺は様相が少し異なる。元の形状をかなりよく保った状態で出土する個体が２つあった。１つは、長軸が周溝の軸に平行して出土した円筒埴輪で（上の２枚の写真）、墳丘の外側東方からの弱い力で側面全体が着地する状況で割れたようである。もう１つは家形埴輪である（左の２枚の写真）。墳丘の外側から周溝に向かって斜めにひっくり返り、頂点の尖った入母屋破風のあたりから勢いをもってそこに突っ込んで潰れたかの状態で、出土した。

この２点は、馬や人などそのほかの埴輪とは、出土したレベルに大きな違いは見られないけれども、破損に至る直接原因は異なる可能性が考えられる。そして、周溝の内側の墳丘に樹立されていたならば、少し解釈を要する出方である。元の形を保っている埴輪を、墳丘の外側から古墳に向かって、あまり丁重に扱わず、放り出す。そんな状況が目に浮かぶ。しかし、最終的な埋没のタイミングは、ほかの埴輪とほぼ同時と考えられそうなのである。

広がる解釈　このように、古墳に樹立された埴輪の末路を検討すると、古墳というモニュメントやそこに葬られた族長級の人物に対するその後の人々の意識にまで、踏み込めるかもしれない。また、この吉田二本松古墳群が短期間の運命だった背景にも推理を広げられそうだ。

東周溝底面付近の須恵器蓋杯（墳丘側から）

東周溝底面付近の須恵器壷（墳丘側から）

２．埴輪が壊れるまで

８号墳に族長が葬られる前後、周溝がまだ埋まる前についても、考古学的な情報が得られている。周溝は空堀だったようである。

東の周溝　底面近くでは、鉄製刀子１点と、その南に 50 ㎝ほど離れてホームベース状に並んだ５組の須恵器の蓋杯が出土した（写真左上）。このうちの２組は、蓋に身が被さる逆転状態である。また、方形をなす南側４組は、集合の中心へとわずかに傾く。蓋が少し持ち上がっていて内部に土が充満していた１組には、針状鉄製品があったが、ほかの４組では内容物は見つからなかった。

供献や祭式というよりも、他地域に類例のある、被葬者用枕としての転用品かもしれない。これらの５組の蓋杯のすぐ上から横倒しになった無傷の須恵器の壷が出土したことも（写真右上）、周溝内埋葬という理解を支持してくれよう。

南の周溝　底面近くでは、東辺ではほぼ完形に復元できる土師器の壷が、破片となって、朱色のきれいな内面が上向けになって散らばって出土した（写真左下）。この土師器の破片の直下には赤色顔料も認められた。また、西辺では赤色顔料のブロックがあり、その直下に、内外面に赤色顔料の付着した別個体の土師器の甕の破片も重なって出土した。

復元できた壷には、底部付近に割れた時の起点と判断される部分があるが、一点に強い衝撃を受けたようには見えない。しかし、底部破片が割れの起点部を西方に向けて出土したのに対し、その上方に近い口縁部破片は、底部破片から１ｍほど離れた東方で出土している。また、口縁部はあまり残っていない。こうしたことから推理すると、壊れた後に破片の移動があったのだろう。割れた原因は、鈍い力での意図的破砕かもしれない。

東と南の対照性　８号墳の東部分と南部分とでは、被葬者が葬られる頃に、場を意識的に使い分けていたことがうかがえよう。南側では、周溝底面近くで、ここかどこかで割れた土師器や赤色顔料を散らばらせた状態にしておき、墳丘には、形象埴輪も大小の円筒埴輪も樹立した。一方、周溝底面近くでおそらく殉葬をしたであろう東側では、おもに須恵器からなる副葬品などのほかには器物を残さず、墳丘には、形象埴輪やそれを引き立たせる小型の円筒埴輪は樹立しなかった。

にぎやかな南面とおとなしい東面。中から赤く弾け出てくるような南面と、死を中に閉じ込めるような東面。そんなコントラストを感じさせる。南流する鴨川と吉田山との間に位置するこの古墳群を営んだ当時の人びとは、この古墳の南方と東方に対して、それぞれ異なった意識を抱いていたようにも思われる。

南周溝底面の土師器（西から）

遺跡上方から南方を望む

円筒埴輪のハケメ１

円筒埴輪のハケメ２

埴輪の製作情報　多くの考古学者がもっとも得意とするのは、遺物の製作痕跡に関する視点からの観察である。その視点からも、吉田二本松８号墳の埴輪を見ておこう。円筒埴輪では、器高や突帯の条数および間隔、器面調整工具や底部最終整形、穿孔をともなう線刻文様の有無、そのほか焼成具合や色調など、製作時の特徴を比べてみると、バラエティを確認できる。形象埴輪の外面調整に用いられた工具の残したハケメ痕跡は、多くの円筒埴輪のそれとも異なるように見える。

さらなる課題　それでは、館の窓辺や馬の背上の族長を見上げていただろう吉田二本松の人たちは、この８号墳に葬るその族長のために、これらの埴輪一式や須恵器などをどのようにして入手できたのだろうか。ここからは、この遺跡の発掘成果だけでは解決できない問題である。京都盆地、畿内、関西、そういった数段階のスケールで考えるべきことだろう。そして、多くの研究者の助けを借りて、総合的に取り組むべき課題のようにも思われる。

馬形埴輪（左側障泥）のハケメ

馬形埴輪

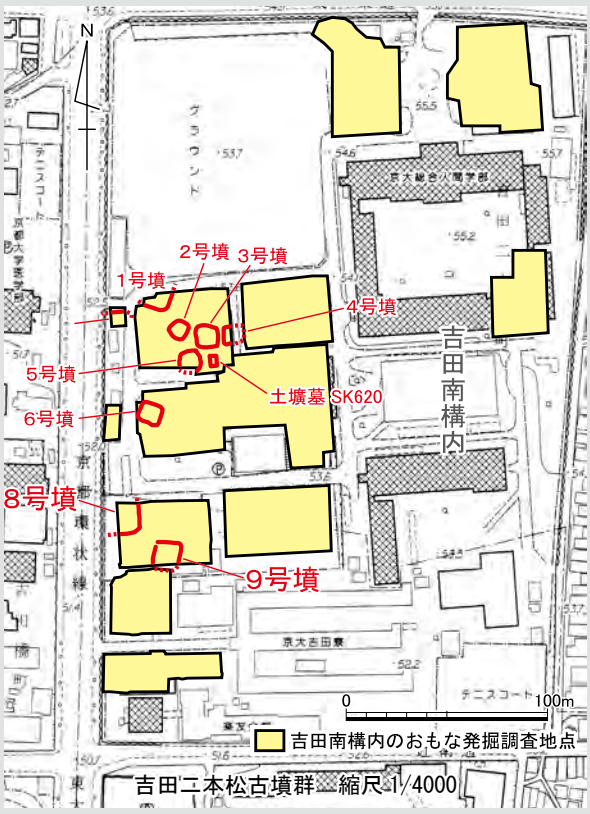
家形埴輪

８号墳のおもな出土遺物

３．キャンパス地下の古墳時代

京都盆地の東北、京都大学吉田キャンパスのある比叡山西南麓には、大和や河内にみるような大古墳や集落の存在は知られていない。京都盆地でこうした遺跡が知られるのは、盆地の西部、桂川流域の乙訓や嵯峨野といった地域である。そのなかで、吉田南構内で見つかっている吉田二本松古墳群は、一辺が 10 数m程度の小さな方形墳のまとまりに過ぎないけれども、情報の乏しいこの地の古墳時代の様子をうかがわせる貴重な事例である。構内ではこのほかにも、古墳の可能性を示す遺構が、断片的ながらいくつか見つかっているほか、古代以降の出土遺物に混じって遺物が出土することも、しばしば見られる。ここでは、こうした情報を集積することで、キャンパスの地下の古墳時代の様子を紹介したい。

古墳時代前期の土師器　古墳時代は、内容の変化から前・中・後の３時期に大きく区分するのが通例である。前期のはじまりについては見解の異同があるものの、定型的な大型前方後円墳の成立段階が前期に含まれるとする点は共通している。大和盆地の南部に、それまでと隔絶した規模の箸墓（はしはか）古墳が築かれ、京都盆地では、南部の椿井大塚山（つばいおおつかやま）古墳のほか、五塚原（いつかはら）古墳や元稲荷古墳、寺戸大塚古墳といった向日丘陵の古墳群が知られている。暦年代では３世紀～４世紀中葉ごろまでと想定されており、この段階の素焼きの土器は、それまでの「弥生土器」から「土師器」へと呼び名を変えるようになる。また、移行期の土器群は、庄内式・布留式などといった型式名でも認識されるが、とくに庄内式の時期については、弥生時代の終末期とする立場と古墳時代に含める立場が並立している。



吉田二本松古墳群　縮尺 1/4000

吉田二本松３号墳全景（南から）

吉田キャンパスにおいては、病院構内で、少量だが比較的残りの良い土師器が出土する。東南方にある岡崎地域で、この時期の集落が岡崎遺跡として知られており、関連づけられるかもしれない。ほかに、北部構内でも流路内から微量の出土があり、北白川地域にも集落などが存在していたと推測される。ただし、いずれも遺構にともなう出土ではないため、具体的にこの時期の様子を復元することは難しい。

吉田二本松古墳群　４世紀後葉～５世紀代とされる古墳時代の中期は、大阪府の古市・百舌鳥（ふるいち・もず）古墳群などに代表されるような巨大古墳の時代として知られるが、キャンパスの地下で見つかっているのは、一辺 10 数m程度の方形の溝をめぐらした小さな古墳である。吉田南構内の西南域でこれまでに９基が確認されてお

棺を納めるための墓壙（ぼこう）と、供えられた須恵器（吉田南構内・南から）

吉田二本松古墳群出土の須恵器と土師器

古墳の周溝の可能性がある弧状の溝（本部構内・東から）

り、所在地名から「吉田二本松古墳群」と呼称している。古墳のほかに、遺骸を納めるために掘られた墓壙（ぼこう）のみが見つかる土壙墓（どこうぼ）もある。すでに詳しく紹介されているように、８号墳の周溝から多量の埴輪片が出土しているのをはじめ、そのほかの古墳の周溝や土壙墓からは、供えられた須恵器や土師器、鉄製品が多数出土している。

須恵器は、専門工人が製作し、窯で高温焼成する技術がこの時代に大陸より伝来し普及したものである。大阪府南部の泉北丘陵一帯にひろがる陶邑（すえむら）窯跡群は、我が国最大の生産遺跡で、そこで出土した須恵器の編年研究が、各地における出土品の型式を特定し、年代を比定していく際の基準となっている。吉田二本松古墳群にともなう須恵器は、ＴＫ 23 型式やＴＫ 47 型式と呼ばれる段階の特徴を示しており、５世紀後半ごろの年代が与えられていることから、古墳もその時期とわかる。ただし、古墳にともなわず周辺から破片が出土した家形埴輪には、５世紀前半の特徴をもつものもあり、より古い段階の古墳も存在していたことも示されている。

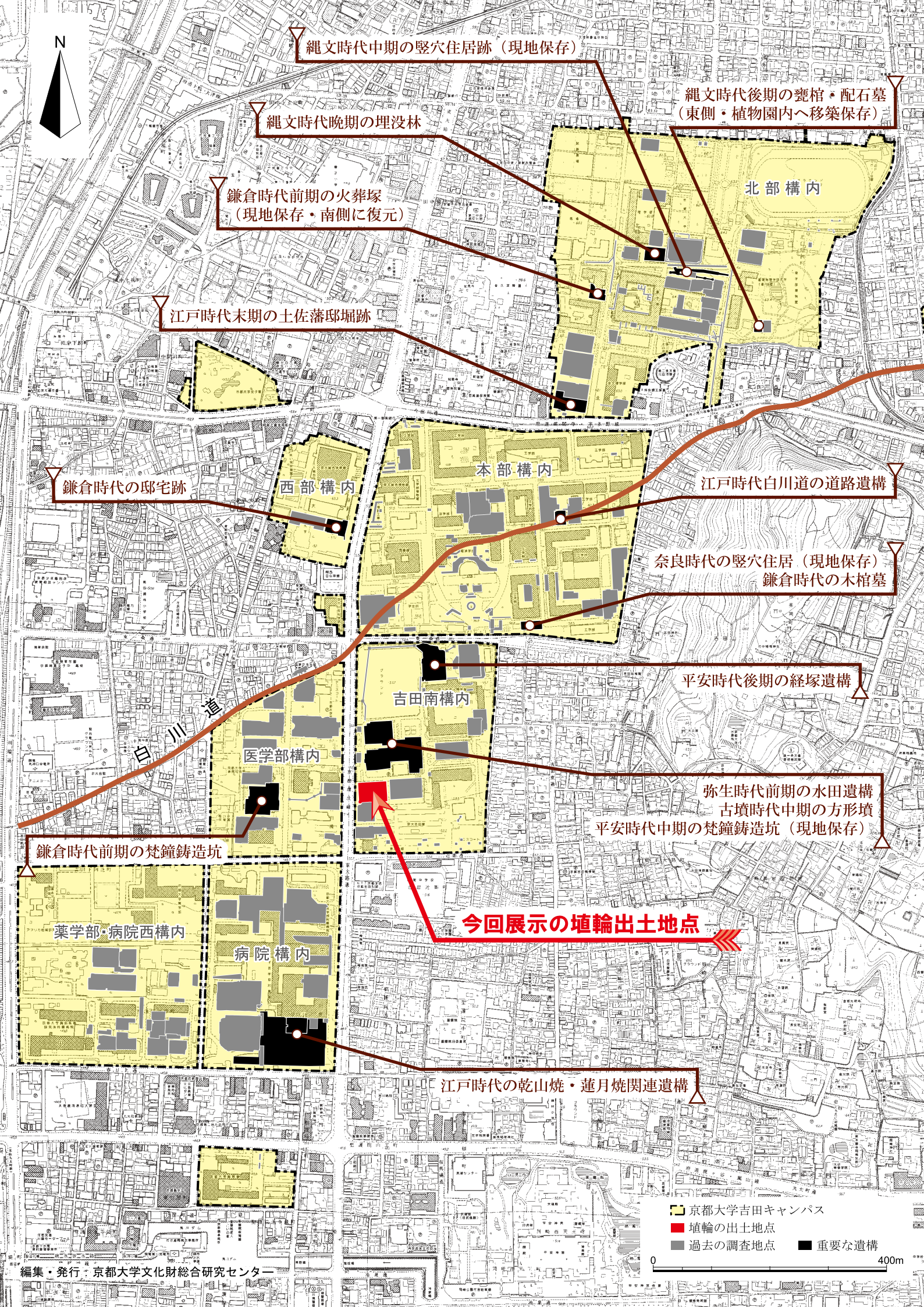
終末期の円墳　６世紀以降の古墳時代後期になると、埋葬施設が追葬可能な横穴式石室へと変わるとともに、各地で群集する円墳の築造が増加する。政治史的には飛鳥時代とされる６世紀末葉以降は、古墳時代としては終末期と位置づけられ、北白川地域でもこうした円墳群の存在が知られるとともに、小倉町・別当町一帯には集落も見つかっている。この地にはやがて「北白川廃寺」と呼称される古代寺院が建立されることから、有力豪族の活動基盤となる地域であったのだろう。

吉田キャンパス一帯は、そうした空間の外縁部にあたるものとみられ、７世紀代を中心とする資料は、比較的頻繁に出土している。まとまった出土は本部構内がもっとも多く、ここでは終末期の円墳かとみられる弧状の溝が、何カ所かで見つかっているほか、小児用の棺などとして埋納された可能性もある大型の甕形土器の一括した出土もみられる。

おわりに　キャンパスの地下の古墳時代については、以上のように、古墳時代中期の半ば以降、すなわち古墳時代の後半期は、小規模な墳墓などが点在している景観を思い浮かべることができる。これに対して前半期については、情報が不足しており、当時の様子を復元するには至らない。今後の蓄積を待たなければならない状況と言えるだろう。

周溝内の須恵器や鉄製刃先の出土状況
（吉田二本松９号墳：北から）

古墳時代土師器甕の出土状況（本部構内・北から）


N
縄文時代中期の竪穴住居跡（現地保存）
縄文時代後期の甕棺・配石墓
（東側・植物園内へ移築保存）
縄文時代晩期の埋没林
鎌倉時代前期の火葬塚
（現地保存・南側に復元）
江戸時代末期の土佐藩邸堀跡
北部構内
本部構内
西部構内
鎌倉時代の邸宅跡
江戸時代白川道の道路遺構
奈良時代の竪穴住居（現地保存）
鎌倉時代の木棺墓
平安時代後期の経塚遺構
吉田南構内
白川道
医学部構内
弥生時代前期の水田遺構
古墳時代中期の方形墳
平安時代中期の梵鐘鋳造坑（現地保存）
鎌倉時代前期の梵鐘鋳造坑
今回展示の埴輪出土地点
薬学部・病院西構内
病院構内
江戸時代の乾山焼・蓮月焼関連遺構
京都大学吉田キャンパス
埴輪の出土地点
過去の調査地点
重要な遺構
0
400m
編集・発行：京都大学文化財総合研究センター